The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	巻頭言 : 第8号の発刊に寄せて
Author(s)	中島, 和子
Citation	母語・継承語・バイリンガル教育（MHB）研究. 2012, 8, p. 1-2
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/25037
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

巻頭言
第８号の発刊に寄せて

母語・継承語・バイリンガル教育（MHB）研究は、2003年に数名の有志が始めたささやかな研究会であったが、2004年にプレ創刊号（2010年に復刻版）、2005年に『母語・継承語・バイリンガル教育（MHB）研究）』紀要創刊号を発刊、その後順調に進んで今年度第8号の刊行の運びとなった。紀要の発刊には、人的にもまた財政的にも並々ならぬ水面下の努力が必要であり、MHBとして第8号が無事刊行できることは、ことのほかうれしくまた誇らしく思う。

MHB紀要第8号に関連して特記すべきニュースが2つある。すでにMHBホームページで公表されているが、1つは『母語・継承語・バイリンガル教育（MHB）研究）』紀要がISSN番号を取得したこと、もう1つは同紀要の掲載論文がCiNiiを通してアクセス可能になったことである。ISBNが図書・書籍に付される10桁の数字であるのに対して、ISSNは国立国会図書館の管理下、定期刊行物に付される8桁の数字である。MHB紀要8号からISSN番号が付されることになった。やっとこれで学術出版界の市民として認知されたことになる。2つ目は、MHB紀要の掲載論文が国立情報学研究所（NII）が管理する論文・図書・雑誌の学術情報ネットワークCiNii（学術情報ナビゲータ）で検索できるようになったこと。過去のプレ創刊号および第1号から第7号までのすべての論文が「（定期）刊行物」としてダウンロード可能である。MHBがモットーとする特殊な領域の学問的かつ実践的な成果が、MHBという枠を越えて学術論文の仲間入りをし、今後広く一般の読者に読まれる可能性を示すものである。

MHB研究会も早や9年が経ち、来年は10周年を迎える。これまで目標として掲げてきたのは会則第3条にあるように、1）研究活動の活性化、2）実践活動の質の向上、3）情報交換・情報発信およびリソースの収集である。そして研究・実践の対象領域としては、つぎの4つを掲げている。

1. 先住、定住、新来児童生徒の母語・継承語教育
2. 日本人・日系児童生徒の継承語としての日本語教育
3. ろう児・難聴児のためのバイリンガル教育
4. 海外・帰国児童生徒教育、国際学校・外国人学校児童生徒教育、その他各種イマージョン教育

第8号で取り上げたテーマを以上の4領域と照合してみると、まず《招待論文》は、英語圏から帰国した中高生の英語力保持伸長を論じたもので領域4、2つの《研究論文》は、国内の新来外国人児童生徒の母語・継承語教育ではなく、マジョリティ言語である日本語習得を論じたもので該当領域なし、《実践報告》は大学における海外の継承日本語教育を扱ったもので、領域2に該当すると考えられる。時代の要請はまったなしである。10年目を迎えようとする今、対象領域に関しても見直しや拡張が必要なことは明らかであろう。

もともと母語・継承語・バイリンガル教育研究会という名称は、一世児が必要とする「母語保持伸長教育」、二世児にとって必要不可欠な「継承語教育」、三世児以降に望まれる「学校教育の中に組み込まれたしっかりとしたバイリンガル教育」をイメージしたものである。時代の流れとその要請に応えて、対象領域の焦点を変えていく必要性を初めから察知していたと言える。現在、日本はまさに二世児時代を迎えており、二世児の低学力問題とその根底にある家庭での継承言語問題、アイデンティティ問題に真摯に向き合う必要がある。また世界は急速にバイリンガルからマルチリンガル育成時代に大きく舵が切られている。さらに忘れてならないのはMHB研究会が海外会員を擁する会だということである。2011年3月現在、会員577名、そのうち133名（25%）が世界各地に在住する海外会員、その国数は25カ国に及ぶ。MHB紀要は、これら世界各地の会員の問題意識やニーズにも、敏感に応えていく必要があるのである。

MHB紀要のつぎの10年に期待することは、国内外の日本人・外国人を含め、特に幼児・年少者が持つ既存言語能力、育成可能な言語能力を貴重な言語資源とし、複数言語育成の視点に立った多くの論文を掲載していくことであろう。またこれまでの10年の歩みを継承し、MHB紀要を通して多くの読者が勇気づけられ、専門的知識を深めると同時に、その成果がさまざまな形で次世代に還元されることを望んでやまない。

母語・継承語・バイリンガル教育（MHB）研究会　研究会会長
中島 和子
2012年3月